九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中学校における居場所に関する研究

田中, 麻貴
九州大学大学院人間環境学府

田嶌, 誠一
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/3587

出版情報：九州大学心理学研究. 5, pp.219-228, 2004-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2004, Vol.5, 219-228

中学校における居場所に関する研究

田中　麻貴　九州大学大学院人間環境学府
田嶌　誠一　九州大学大学院人間環境学研究院

A study on Ibasho at junior high school

Maki Tanaka (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)
Seiichi Tajima (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of the present study was to investigate relationship between Ibasho at junior high school and students' enjoyment of attending school in terms of supporting their adaptation to school. Participants were 314 junior high school students. The main results were as follows : (1)The junior high school students that had Ibasho at their school enjoyed attending school more than ones who didn' t have Ibasho. Moreover, there was no difference between classrooms and other places in the degree of their enjoyment of attending school. (2)There were positive correlations between students' enjoyment of attending school and each of the following three factors that are features of Ibasho ; "sense of fulfillment", "sense of acceptance and having interest", and "sympathy and sense of solidarity".

Keywords: Ibasho, junior high school students, enjoyment of attending school

問題と目的

近年，新聞やテレビなどで『居場所』という言葉がしばしば取り上げられるようになっている。また，居場所の概念は心理臨床場面においても注目を集めており，事例を通してさまざまな観点から論じられている（北山，1993；廣井，2000）。さらに，不登校への対応として居場所の重要性が指摘されたり（文部省中学校課，1992），"学級，学校を居場所に"というスローガンが学校教育において掲げられる（ベネッセ教育研究所，1997）など，学校現場との関連で児童・生徒の居場所への関心が高まってきている。学校内の保健室や相談室が不登校生徒の居場所となることも報告されている（佐治・岡村・加藤・八巻，1995；竹森，1999）。このように児童・生徒の居場所に注目が集まっているのは，子どもたちとって居場所の喪失や居場所のなさが危機的なもの（中村，1998a）であり，とりわけ学校での居場所のなさや喪失は，不登校などの学校現場における種々の問題につながりやすい（藤岡，1994；佐治ら，1995；芹沢，2000；竹森，1999）からであると考えられる。ゆえに，心理援助の視点から，学校内の居場所に注目することには意義があるといえよう。しかし，これまでのところ中学生の居場所についての実証的な研究は少なく，学校内において生徒が捉える居場所は明確にされていない。また，学校適応と居場所の関連を実証的に示したものも見当たらない。さらに，学校適応を支えるのは学級での友人関係である（古市，1994）など，学校適応と教室での居心地のよさの関連が指摘されているが，居場所であると感じられる具体的な場所の相違によって学校適応に差がみられるのかについては明らかにされていない。そこで本研究では，心理援助の視点に立ち，中学校における居場所を測定する尺度を作成し，以上のような観点から学校適応との関連を検討することとする。

ところで，居場所という言葉は日常語としても用いられ，曖昧さを多分に含んだ言葉である。居場所の概念を論じたものに以下のようなものがある。北山（1993）は，自分が「いること」の基盤として居場所を位置づけ，自分が自分であるための環境を居場所としている。また，田島（2000）は，青年にとっての居場所は「自分らしくいられたり，安心できる場であるということ，かつ，その場で自分が必要とされていたり，役に立っているという感覚を持っていること」が重要であるとしている。青年心理学事典によると，居場所とは「生き生きと生きるために必要なものであり，かつ私が私であることを確認し実感するためのものでもある（小澤，2000）」とされている。藤竹（2000）は，ある場所に対して「そこそこが自分のものであり，落ち着きや安定感，充実感や所属感，さらには保護されているという感覚」などを持つことができたとき，その場所が居場所となると述べている。さらに，児童・生徒の居場所に関しては，久保・西村（1993）が，居場所を「自己存在が肯定できる時間と場所が保証された空間」と捉えている。また，奥地（1991）は，居場所は「居心地がいい所，その人にとって安心できる場」であり，「自分が自分であることを認

められる所」としている。

一方，居場所を測定する尺度を用いた実証的な研究も数は少ないながらも行われている。大久保・青柳(2000)は，「心理的居場所」を対人的な概念として捉え，「心理的居場所」があることは人に心地よい感情を生み，一方「心理的居場所」がないことは不快感情を生み出すと仮定し，「居場所がある」状態に関するポジティブ尺度と「居場所がない」状態に関するネガティブ尺度からなる「居場所感尺度」を作成している。また，中村(1999)は，居場所を「諸活動の基地や拠点となるような心理的･物理的空間」とし，居場所の感覚を生起させ，規定するような因子として「居心地の悪さ」「居心地のよさ」「学校・友だち」「他者による支援」「家・家族」を見出した。さらに，富永･北山(2001)は，大学生の自由記述をもとに，「居場所がある」状態に関して，「受容的環境」「連帯感」「役割」「安心感」からなる尺度を作成した。

以上の先行研究を概観してみると，居場所がある状態としては，「安心できる」「落ち着いていられる」と感じられることが共通して挙げられている。一方，「他者に認められる」「ありのままの自分でいられる」「何か打ち込めることがある」場所などが居場所であるという捉え方もなされている。しかし，これらは研究者間で共通した捉え方ではない。それは，居場所を例えば「他者に認められる場である」と捉える人もいれば，「打ち込めることがある場である」と捉える人もいるという個人差が生じるためではないだろうか。つまり，ある場所を居場所と感じる際に，認知されるその場の状態は個々人で異なっていると考えられる。したがって，「他者の存在」や「承認・評価」「充実感」などは，居場所がある状態の十分条件ともいえるものであり，居場所がある状態の特徴のひとつであると捉えた方がよいと思われる。これに対し，先に述べた「安心できる」「落ち着いていられる」という認知は，居場所がある状態の必要十分条件といえよう。従来の居場所を測定する尺度においても，以上の二点は同一の次元で扱われている。ゆえに，本研究では中学校における居場所について明らかにするため，従来の居場所の捉え方を見直し，居場所があるときに感じられる安心感などを居場所感とし，『居場所感尺度』を作成することとする。さらに，「他者の存在」や「承認・評価」，「充実感」などに関しては，居場所がある状態の特徴のひとつとして捉え，生徒が認知している『居場所の特徴を測定する尺度』を作成する。ここでいう居場所の特徴は，「認められている」などの個人に関する要素だけでなく，場所の雰囲気などの場所に関する要素も含む。場所の雰囲気に関する項目を尺度内に取り入れた先行研究はある（中村，1999）が，個人の要素と同一の次元で扱われており，場所に関する特徴が捉えにくい。ゆえに，本研究では，居場所の特徴がどのようなものかを詳細に捉えるため，生徒が捉える居場所の特徴の中に場所の要素を取り入れ，個人の要素と別次元で扱うこととする。

ところで，上記の概念的な居場所研究とは別に，『居場所づくり』という実践的な試みも行われている。例えば，峰松・山田・冷川（1984）は，分裂病圏の大学生援助のため学生相談室の一角を提供している。利用者はそこで気の赴くままに過ごす。それは治療効果を目指して行われているわけではないが，結果としてそこに通う学生の状態が安定することが報告されている。同じような試みが精神科の思春期外来や青年期境界例や強迫パーソナリティの事例等を対象とした学生相談でも行われており，同様の有用性が指摘されている（青木，1996；田嶌，1991, 1995b, 1998）。近年では，中学校における心理臨床活動においても居場所づくりが展開されている（田嶌，1995a, 2000, 2001）。居場所研究においては，概念研究だけでなく，実践的な居場所づくりも視野に入れた研究を行う必要があると思われる。上記のような居場所づくりに共通する要素としては，利用者が特定の場所に実際に足を運ぶことが挙げられる。中村（1998a）によると，居場所を捉える際には心理的な感覚だけでなく，ある場所への慣れやその場に実際に足を運ぶという行動が重要である。また，ある場所に個人の意味づけがなされたときにその場所が居場所となるという指摘（藤竹，2000）や，具体的な場所と居場所の関連の指摘（中村，1998b；小畑・伊藤，2001）もなされている。居場所づくりの視点に立つと，居場所があるという状態を捉える際には，先述した居場所感の高さだけでなく，実際に足を運ぶ場所が存在するかについても考慮する必要があると考えられる。ゆえに，本研究では居場所があるという状態を，実際に足の向く場所があり，そこでの居場所感が高い場合と捉えることとする。

本研究では，中学校における居場所について明らかにし，学校適応との関連を調べることを目的とする。具体的には，『居場所感尺度』と『居場所の特徴を測定する尺度』を作成し，それぞれの尺度と学校適応との関連を検討することとする。なお，本研究では居場所を，実際に足を運び，安心できる，落ち着けるなどという居場所感をもてる場所と捉える。また，居場所があると感じられる際に認知される場の特徴を居場所の特徴とする。

第一研究

目　的

先行研究において同一次元で取り扱われていた，安心感などの居場所感と生徒が認知している居場所の特徴を分けて捉え，中学校における『居場所感尺度』と『居場

所の特徴を測定する尺度』をそれぞれ作成する。

方　法

1）調査対象

A県内の公立中学校2校の1，2年生，計314名。なお，内訳は，1年生154名（男子75名，女子79名），2年生160名（男子81名，女子79名）であった。このうち，記入漏れや記入ミスのあったものを除き，最終的に有効回答者283名（有効回答率：90.13%）を分析対象とした。内訳は，1年生140名（男子67名，女子73名），2年生143名（男子70名，女子73名）であった。

2）調査時期

2002年11月27日から12月9日。

3）調査内容

①居場所感尺度

予備調査において実施した大学生に対する“居場所がある状況”と“居場所がない状況”に関する自由記述形式の質問紙調査，及び，先行研究をもとに項目案を作成した。さらに，心の教室相談員として中学生と関わる機会のある心理学専攻の大学院生らと項目案を再考し，新たな項目の追加や中学生にとって難解な言葉の修正を行い，最終的に10項目からなる項目案を作成した。これらの項目に対しては，具体的な場所を想起させ評定を求めた。具体的には，まず「休み時間や放課後に自然と足の向く場所がありますか」と尋ね，「ある」か「ない」かのどちらかを選択してもらった。「ある」に回答した者は，その場所を「1自分のクラスの教室，2他のクラスの教室，3廊下，4ベランダ，5部室・部活動場所，6図書室，7保健室，8カウンセリング室（心の相談室），9職員室，10その他」の中からひとつだけ選択するよう求めた。さらに，「ある」と答えた者には選択した場所にいるときのことを，「ない」に回答した者には自分のクラスの教室にいるときのことを思い浮かべてもらい，そこにいるときの気持ちに関する項目に，「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「だいたいあてはまる」「よくあてはまる」の4段階で評定を行うよう求めた。

②居場所の特徴を測定する尺度

居場所感尺度と同様に，予備調査及び先行研究をもとに項目案を作成し，こころの教室相談員の経験をもつ心理学専攻の大学院生により項目案を再考し，最終的に37項目からなる項目案を作成した。居場所感尺度に引き続き，同様の場所にいるときのことを思い浮かべ，そこにいるときの自分自身やその場所に関する項目に「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「だいたいあてはまる」「よくあてはまる」の4段階で評定を行うよう求めた。

4）調査手続き

上記の尺度からなる質問紙を用い，無記名方式で学級単位の一斉調査を行った。なお，調査の実施は各学級担任に依頼した。記入を終えた質問紙は，後日中学校を訪問し回収した。

結　果

1）居場所感尺度について

①質問項目の検討

各項目の回答について「よくあてはまる―4点」～「まったくあてはまらない―1点」のように得点化した。逆転項目については，「よくあてはまる―1点～「まったくあてはまらない―4点」のように得点化した。

居場所感尺度の10項目について，一次元構造であることを検討するため主成分分析を行った。その結果，第一主成分への因子負荷量が.50未満の項目は「違和感（しっくりこない感じ）を感じる」「その場にいたくないと思う」であり，その他の8項目はいずれも負荷量.50以上の正の値を示した（Table 1）。

②信頼性の検討

第1成分への因子負荷量が.50以上であった8項目について信頼性を検討するため，Cronbach の α 係数を算出した。その結果，α =.92という値が示された。

2）居場所の特徴を測定する尺度について

①質問項目の検討

各項目の回答について「よくあてはまる―4点」～「まったくあてはまらない―1点」のように得点化した。逆転項目については，「よくあてはまる―1点」～「まったくあてはまらない―4点」のように得点化した。なお，居場所の特徴に関しては，個人に関する要素と場所の要素を別次元として捉え，次元ごとに因子分析を行った。

Table 1
居場所感尺度の主成分分析の結果（N=283）

項目	負荷量
おちつく	.85
ほっとする	.82
楽である	.81
いごこちがいい	.81
安心する	.80
リラックスする	.80
のんびりする	.78
くつろぐ	.76
その場にいたくないと思う	.35
違和感（しっくりこない感じ）を感じる	.03
固有値	5.294
寄与率（%）	52.94

個人的要素に関する27項目について，最尤法，及び，Equamax 回転による因子分析を行った。その結果，固有値の推移と解釈可能性によって，5因子解が妥当であると考えられた。因子負荷量が各因子について.30以上であるという基準にしたがって項目を検討し，最終的に5因子20項目を得た(Table 2)。第1因子は，他者から自分の存在を受け入れられたり，関心をもたれたりすることに関連する項目が含まれたため，『受容・関心』因子と命名した。第2因子には，生徒自身の充実感に関連する項目が含まれたため，『充実感』因子と命名した。第3因子には，他者への共感や仲間意識に関連する項目が含まれたため，『共感・連帯感』因子と命名した。第4因子は，周囲からの評価のなさや，ありのままの自分でいられることに関連する項目が含まれたため，『評価

Table 2
居場所の特徴を測定する尺度（個人要素）の因子分析結果

（最尤法・Equamax 回転後）（N＝283）

因子名及び質問項目	因子負荷量				
	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
受容・関心　（α=.85）					
自分のことを気にかけてくれる人がいる	**.73**	.16	.33	.22	.03
自分のことをあたたかく受け入れてくれる人がいる	**.66**	.31	.32	.19	.09
自分のすることをみとめてくれる人がいる	**.62**	.23	.28	.09	.15
考え方をまわりの人とわかり合える	**.55**	.22	.34	.12	.27
まわりの人から関心をもたれている	**.45**	.20	.16	.00	.07
まわりの人から期待されている	**.36**	.25	.23	.03	.10
充実感　（α=.77）					
がんばってとりくめるものがある	.16	**.77**	.21	.05	.01
熱中できるものがある	.19	**.74**	.10	.10	−.01
好きなことができる	.22	**.51**	.22	.23	.20
共感・連帯感　（α=.77）					
仲間だと感じる人がいる	.34	.16	**.68**	.07	.16
ともだちや好きな先生がいる	.31	.18	**.57**	.20	−.04
同じ感じ方をする人がまわりにいる	.36	.25	**.52**	.12	.28
まわりの人と協力して何かにとりくむことができる	.26	.31	**.40**	.07	.11
評価のなさ・自然な自分　（α=.62）					
自分ひとりがめだたなくてすむ	.01	−.04	.03	**.80**	−.18
まわりを気にしなくてよい	.16	.06	−.11	**.52**	.13
まわりの人からうるさく言われなくてすむ	−.07	.09	.29	**.49**	.08
自分をごまかす必要がない	.07	.19	.20	**.34**	.15
非孤立感　（α=.51）					
(*) ひとりだけとり残された感じがする	.07	.08	.07	.10	**.66**
(*) 自分だけ浮いていると感じる	.05	.09	−.06	.04	**.53**
(*) ひとりになれる	.00	−.20	.18	−.06	**.38**
因子負荷量2乗和	2.54	2.06	1.99	1.52	1.22
因子寄与率（%）	12.69	10.29	9.96	7.60	6.12
累積寄与率（%）	12.69	22.98	32.95	40.55	46.67

(*)は逆転項目

のなさ・自然な自分』因子と命名した。第5因子には，孤立感を否定するような項目が含まれたため，第5因子を『非孤立感』因子と命名した。

場所要素に関する9項目について，重み付けのない最小二乗法，及び，Promax 回転による因子分析を行った。その結果，固有値の推移と解釈可能性によって，3因子解が妥当であると考えられた。因子負荷量が複数の因子において.35以上の値を示した項目を除外し，最終的に3因子10項目を得た（Table 3）。第1因子には，場所のなごやかな雰囲気と関連する項目が含まれたため，『なごやかさ』因子と命名した。第2因子には，場所の明るい雰囲気と関連するような項目が含まれたため，第2因子を『明るさ』因子と命名した。第3因子には，その場所が自分たちのものであると感じる独占感と関連する項目が含まれたため，第3因子を『独占感』因子と命名した。

②信頼性の検討

次元ごとに各因子の信頼性を検討するため，Cronbach の α 係数を算出した。その結果，個人要素に関しては，第1因子で α =.85，第2因子で α =.77，第3因子で α =.77，第4因子で α =.62，第5因子で α =.51，であった。また，場所要素に関しては，第1因子で α =.78，第2因子で α =.67，第3因子で α =.52であった。

考　察

1）居場所感尺度について

居場所感を測定する項目案について主成分分析を行い，一次元構造の居場所感尺度を作成した。その信頼性係数の高さより，本尺度は一定の内的整合性を有するものと考えられる。本尺度の項目は，中村（1999）が居場所の感覚を規定する因子として見出したもののうち「居心地のよさ」因子，及び「居心地悪さ」因子の逆転版，富永・北山（2001）による居場所がある状態に関する尺度の「安心感」因子に相当するものと考えられる。つまり，本尺度は，先行研究における居場所に関する尺度の安心感などの気持ちに相当する項目を取り出した形で構成されていると考えられよう。

2）居場所の特徴を測定する尺度について

居場所特徴を測定する尺度の37項目については，対人関係などの個人要素と，場所の雰囲気などの場所要素の

Table 3
居場所の特徴を測定する尺度（場所要素）の因子分析結果

（重み付けのない最小2乗法・Promax 回転）（N＝283）

因子名及び質問項目	因子負荷量		
	因子1	因子2	因子3
なごやかさ　（α=.78）			
なごやかな感じがする	**1.04**	−.09	−.15
開放的な感じがする	**.70**	.01	−.06
あたたかい感じがする	**.45**	.21	.24
明るさ　（α=.67）			
にぎやかな感じがする	−.01	**1.00**	.00
明るい感じがする	.22	**.62**	.09
(*) 静かな感じがする	−.27	**.52**	−.20
独占感　（α=.52）			
自分や自分たちだけの場所であると感じる	−.11	−.04	**.76**
お気に入りのものがある	.16	−.07	**.49**
自分のためのきまった場所（席など）がある	−.11	−.01	**.42**
因子負荷量2乗和	2.38	1.90	1.85
因子間相関係数　因子1	—		
因子2	0.270	—	
因子3	0.599	0.294	—

(*)は逆転項目

2つの次元ごとに因子分析を行った。各因子の信頼性係数は検討の余地が残されているが，一定水準の信頼性が得られたと考えられる。その結果，中学校における居場所の特徴として「受容・関心」「充実感」「共感・連帯感」「評価のなさ・自然な自分」「非孤立感」「なごやかさ」「明るさ」「独占感」の8つが取り出された。

個人要素については5因子が抽出されたが，そのうち「評価のなさ・自然な自分」「充実感」は本研究において新たに見出された因子である。大久保・青柳（2000）は「評価のなさ・自然な自分」因子と類似した「期待のなさ」因子を居場所がない状態として取り上げていたが，本尺度では逆にそれは「居場所がある」という状態の特徴として抽出された。これは，評価されることのない時間や空間も居場所となり得るという指摘（小畑・伊藤，2001）と一致する。さらに，藤竹（2000）は「人間的居場所」を，たとえ自分の周りに他者が存在していたとしても，「他者」として認知しておらず，安らぎを覚えたりほっとすることができ自分らしさを取り戻すことのできる場所としているが，「評価のなさ・自然な自分」という特徴は，これに相当するものであるとも考えられる。よって，他者の関心や評価がないことも居場所の特徴のひとつと考えることができると思われる。また，「充実感」因子に関しても，類似した項目が先行研究の尺度の中に含まれていたが，それらの項目が因子のひとつとして抽出されることはなかった（中村，1999）。藤竹（2000）により，ある場所が居場所となるときには充実感を感じると指摘されていることからも，「充実感」を居場所の特徴のひとつとして捉えることは妥当であると思われる。さらに，本尺度では，生徒が捉える居場所の特徴として，従来指摘されてきた物理的な場所の要素を取り入れようと試みた。その結果，居場所の特徴の場所要素として3因子が抽出された。ゆえに，中学校における居場所は，明るくにぎやかであるとか，あたたかい雰囲気でなごやかであるとか，自分たちの場所であると認知されるということが示唆された。本尺度では，個人要素と物理的な場所の要素を別次元扱うことで，先行研究では捉えられなかった居場所における場所に関する特徴を捉えることができたと考えられる。以上のように，本研究の結果から居場所があると感じられる際に認知される多様な特徴が見出されたと考えられる。

第二研究

目的

心理援助の視点から，学校内の居場所と学校生活における適応感の関連について検討する。第一に，物理的な場所と居場所感によって，学校適応に差がみられるかどうかについて調べる。第二に，学校適応と生徒が捉えている居場所の特徴の関連性について検討する。

方法

1）調査対象

A県内の公立中学校2校の1，2年生，計314名（第一研究と同じ）。

2）調査時期

2002年11月27日から12月9日（第一研究と同じ）。

3）調査内容

①居場所感尺度

第一研究で作成された居場所感尺度。

②居場所の特徴を測定する尺度

第一研究で作成された居場所の特徴を測定する尺度。

③学校享受感尺度（古市，1994）

学校適応の指標として，古市（1994）により作成された「学校享受感尺度」を用いた。この尺度は，先に古市（1991）が作成した「学校ぎらい感情尺度」の反転項目版であり，学校生活の楽しさの程度を測定する尺度である。α係数.896と内的整合性が高く，適応傾向との基準関連妥当性の検討が行われている。回答は，各項目について「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「だいたいあてはまる」「よくあてはまる」の5段階で評定するよう求めた。

4）調査手続き

上記の尺度からなる質問紙を用い，無記名方式で学級単位の一斉調査を行った。なお，調査の実施は各学級担任に依頼した。記入を終えた質問紙は，後日中学校を訪問し回収した（第一研究と同じ）。

結果

1）居場所感と物理的な場所による学校享受感の差異についての検討

居場所を捉える際には，その場に実際に足を運ぶという行動が重要であると考えられるため，自然と足の向く場所があると答えた生徒（n＝190）を選出した。ついで，学校享受感尺度の合計得点について，居場所感が高い生徒と低い生徒の差異を検討するため，分析対象生徒の居場所感合計得点の平均値より上位に位置するものを「居場所感H群（n＝68）」，下位に位置するものを「居場所感L群（n＝122）」として，群わけを行った。

さらに，ここでは，学校享受感尺度の合計得点について，物理的な場所の相違による差も検討するため，教室と教室以外という物理的な場所による「教室群（n＝52）」と「教室以外群（n＝138）」という群分けを行った。なお，物理的な場所の群わけに関しては，教室が居場所になることが期待されている（ベネッセ教育研究所，1997）ことから，教室と教室以外という分類を用いた。

居場所感尺度の合計得点，及び物理的な場所による群

Table 4
居場所感と物理的場所による学校享受感の差異について

		居場所感H群		居場所感L群		*F*値		
		教室群	教室以外群	教室群	教室以外群	居場所感	足の向く場所の有無	交互作用
学校享受感合計	N	35	87	17	51			
	Mean	42.07	40.99	38.35	37.54	3.56+	n.s.	n.s.
	SD	12.92	10.22	10.98	11.01	H群>L群+		

+p<.10

Table 5
学校享受感と居場所の諸特徴との Pearson の積率相関係数（N=122）

	居場所の特徴(個人要素)					居場所の特徴(場所要素)		
	受容・関心	充実感	共感・連帯感	評価のなさ・自然な自分	非孤立感	なごやかさ	明るさ	独占感
学校享受感合計得点	.415***	.405***	.477***	.087	.147	.310**	.273**	.331***

**p<.01, ***p<.001

わけを独立変数，学校享受感尺度の合計得点を従属変数とする，居場所感の高低（2）×物理的な場所（2）の2要因分散分析を行った。その結果，交互作用はなく，居場所感の主効果にのみ有意傾向が認められ（$F_{(1,186)}$=3.56，p<.10；Table 4），L群に比べH群が有意に高い傾向が示された。

2）居場所の諸特徴と学校享受感の関連

居場所があると感じている生徒が認知している居場所の特徴と学校適応との関連を調べるため,自然と足の向く場所があると答え，かつ居場所感H群に属する生徒(n=122）を選出した。その上で，学校享受感の合計得点と，居場所特徴の下位尺度得点の関連性を検討するために，それぞれ Pearson の積率相関係数を算出した(Table 5)。

その結果,「明るさ」において r=.273（p<.01),「なごやかさ」において r=.310（p<.01),「独占感」において r=.331（p<.001）の弱い正の相関が，また「充実感」において r=.405（p<.001),「受容・関心」において r=.415（p<.001),「共感・連帯感」において r=.477（p<.001）の中程度の正の相関がみられた。

考　察

1）居場所感と物理的な場所による学校享受感の差異について

自然と足の向く場所を有する生徒に関して，物理的な場所と居場所感の高低による，学校享受感の差について検討した結果，居場所感H群はL群に比べ，学校享受感合計得点が有意に高い傾向が示された。このことから，実際に足を運ぶ場所において居場所感の高い生徒は，学校を楽しいと感じており，学校に適応しているという可能性が示唆された。本人が実際に足を運び，慣れ親しんだ場所において，安心感等をもてるときに，その場所が居場所となると捉えるならば，学校内に居場所がある生徒は，学校を楽しみ適応している可能性が高いと考えられる。居場所のなさが学校不適応につながることや，不登校生徒の多くが学校内に居場所を見失っているという指摘が多くなされてきた（藤岡，1994；佐治・岡村・加藤・八巻，1995；芹沢，2000；竹森，1999）が，この結果は，これらの見解と一致する。さらに，この結果からは，実際に足を運ぶ場所があっても，そこでの居場所感が低い生徒は高い生徒に比べて学校享受感が低いと考えることもできる。足を運ぶ場所をもつ生徒は，一見学校を楽しんでおり，学校に適応しているように見えるかもしれない。しかし，そうした生徒の中にも，学校への適応感を持てず潜在的なニーズを抱える生徒が存在する可能性は否定できない。そのような生徒にとって，実際に足を運ぶ場所は，何らかの問題から回避するための場所として用いられているのかもしれない。

一方，実際に足を運ぶ場所を有する生徒の学校享受感には，物理的な場所によって差がみられなかった。これは，足を運ぶ場所がある生徒の学校への適応感は，その場所が教室か教室以外かに左右されないことを示唆していると考えられる。学校適応を支えるのは，学級での友人関係であるという指摘（古市，1994）があるが，本研究の結果は，教室だけでなく，教室以外の場所における生徒の学校生活に着目することの重要性を示唆している

と思われる。

2）居場所の諸特徴と学校享受感の関連

自然と足の向く場所を有しており，かつ居場所感の高い生徒に関して，Pearson の積率相関係数を算出した結果，学校享受感の合計得点と，居場所の特徴における「明るさ」「なごやかさ」「独占感」のそれぞれの下位尺度得点に弱い正の相関が，また「充実感」「受容・関心」「共感・連帯感」のそれぞれの下位尺度得点に中程度の正の相関がみられた。これは，学校内の居場所が，充実感や他者との関わりをもてる場所，また明るく，なごやかな雰囲気の場所，独占できるような場所だと認知されるほど，学校を楽しいと感じられる可能性があることを示唆していると思われる。

ところで，中学校における居場所の特徴である「評価のなさ・自然な自分」「非孤立感」と学校享受感との間には，相関がみられなかった。この結果は，生徒が認知し得る居場所の特徴すべてが，学校適応と関連しているわけではないことを示している。中学生はありのままの自分をみせることよりも，仲間と同じであることを求める傾向にある（保坂，1996；落合・佐藤，1996）。ゆえに，学校内においては仲間に受け入れられることや共感できることが重視され，学校享受感と「評価のなさ・自然な自分」という因子の間には関連が見出されなかったと考えられる。しかし，一方で「非孤立感」因子と学校享受感との関連が見出されなかったことから，学校内で孤立しないことが必ずしも学校適応につながるとはいえないことが示された。それは，ひとりになることを肯定的に受け止めている生徒と，ひとりになるととり残されたような気がして安心できないという生徒がおり，生徒によってひとりになることの受け止め方が異なるからかもしれない。以上のことから，主に学校適応と関連のある居場所の特徴として「充実感」「受容・関心」「共感・連帯感」などが挙げられ，生徒の学校適応を支える上でそのような特徴を認知できる居場所が重要な役割を果たしていると考えられる。

総合考察

本研究において，中学校における居場所に関して，居場所感尺度と居場所の特徴を測定する尺度を作成した。その結果，先行研究では示されなかった中学校における居場所について明らかにすることが可能となったと考えられる。さらに，それらの尺度を用いて居場所と学校適応との関連を検討したところ，学校内に居場所がある生徒は，そうでない生徒と比べ学校を楽しいと感じ，適応できているという可能性が示唆された。以上のことから，中学校内に居場所をもつ生徒は学校に適応している可能性が高いといえよう。ところで，学校適応にはストレスの除去よりも学校とのつながりを大切にすべきであるという指摘（本間，2000）があるが，居場所とはストレスフルな状況にあっても，ほっとできて自分を取り戻し何とかストレスに向き合っていくために必要な場所とも考えられる（藤岡，1994）。このことを考慮すると，学校内に居場所を持つことで，学校生活を楽しみ適応できるというだけでなく，学校における種々の問題に向き合うことができると捉えることもできる。すなわち，学校への適応感が高いとはいい難いものの，自ら足を運び慣れ親しんだ居心地のよい場所を見出すことにより，何らかの問題に対処しようとする生徒も存在すると考えられるわけである。たとえば，部活動の友人関係で悩んでいたとしても，昼休みに教室で他の生徒と過ごすことができるので登校できるということが起こり得るのではないだろうか。この点に関しては，本研究で用いた学校享受感に加え，さまざまな学校適応の指標と居場所の関連について今後検討を重ね，明らかにする必要がある。

さらに，ここでは以上の知見をいかした『居場所づくり』という学校現場における心理援助のあり方について考察したい。近年，学校臨床において，相談室を生徒が気軽に出入りできる居場所の一つとして機能させるという居場所づくりの試みがなされている（田嶌，1995a, 2000, 2001）ことは既に述べた。そのような居場所づくりという視点は，学級にいづらくなった生徒が，一時的にでも安心感をもてるような場所となる可能性を有する場所として期待できる（和田井，2002）。また，そのような場所では，教師の目には映りにくい二次的教育援助（日本教育心理学会，1996）や二次的心理援助（田嶌，2003）を必要とする生徒を発見しやすくなったり，生徒同士という同年代の人間関係が自然発生的に生まれたりすると推察される（田嶌，1995a, 2000, 2001）。大人に対して相談をもちかけるということを苦手とする子どもたちにとって，このような学校の相談室や保健室を利用した居場所づくりは，今後さらに重要性を増すと考えられる（田嶌，1995a, 2000）。これに関連して本研究の結果からも，学校適応援助に向け，教室以外の場所に着目することの重要性が示されている。ただし，大人が用意する居場所が子どもたちの居場所となるとは限らないということに留意する必要がある（青木，1996；萩原，1997）。本研究の結果からは，学校適応と関連する居場所の特徴として「受容・関心」「共感・連帯感」「充実感」や場所の「なごやかさ」や「明るさ」が見出されたが，これらの特徴を生徒自身が認知できるような多様な場所を学校内に保障することが重要であろう。以上のような居場所づくりの視点は，生徒の学校適応援助につながると考えられ，学校現場での心理臨床活動において有効であると思われる。

今後の課題としては以下のようなものが挙げられる。

本研究においては，先行研究の中で同一次元として取り扱われていた，安心感などの居場所感と居場所の特徴を分けて捉えた。さらに，居場所の特徴に関しては，個人的要素と場所要素に付いて別次元で取り扱った。そのようにすることで，中学校における居場所について先行研究よりも詳細に捉えることができるようになったと考えられる。しかし，両尺度の妥当性の検討は十分になされたとはいえない。また，両尺度の信頼性についても検討の余地が残されている。そのため，従来同一次元で扱われていた概念を分けて捉えたことの意義を十分には示すことができなかった。さらに，本研究では実際に足を運ぶ場所を考慮するにあたり，「自然と足の向く場所の有無」を問うた。しかし，この質問により「実際に足を運ぶ場所の有無」を適切に捉えることができたかには疑問が残る。ゆえに，本研究で作成された尺度を，今後より多くの標本に実施し，他の変数との関連を検討することを通して妥当性と信頼性を高め，尺度の精錬を行う必要がある。

また，発達的な視点を考慮に入れた居場所の検討も課題として挙げられる。発達段階の特徴が居場所の特徴に反映されることが指摘されている（小畑・伊藤，2001）。ゆえに，発達的視点を取り入れた検討を行うことで，中学生の居場所に特有な特徴を捉えることができると考えられる。

さらに，家庭を含めた居場所の検討を行うことについても，今後検討の余地が残されている。学校の他に，「家」「自分の部屋」などの具体的な場所を，居場所としてとりあげたものもあり（中村，1998b, 1999；小畑・伊藤，2001），中学生は家庭においても居場所を持っていると考えられる。また，学校と家庭では居場所の特徴が異なる（高橋，2000）ことや，家庭で感じられにくい居場所の特徴を学校内の居場所に求める（富永・北山，2001）ことが指摘されている。

以上のような視点から，中学生に特有の居場所についてさらなる理解を深めることにより，生徒の学校適応援助に向けての手がかりを得ることができると思われる。

付　記

本論文は，第一著者が九州大学教育学部に提出した平成14年度卒業論文から抜粋，加筆修正したものである。本論文作成にあたりご校閲賜りました副指導教官の九州大学大学院人間環境学研究院針塚進教授，本論文の調査実施にあたりご協力を賜りました中学校の職員の先生方及び生徒のみなさまに心より御礼申し上げます。

引用文献

青木省三　1996　思春期こころのいる場所――精神科外来から見えるもの――　岩波書店

ベネッセ教育研究所　1997　モノグラフ・中学生の世界 Vol.57　学校内の人間関係　ベネッセコーポレーション

萩原建次郎　1997　若者にとっての居場所の意味　日本社会教育学紀要，**33**，37-44.

廣井いずみ　2000　居場所という視点からの非行事例理解　心理臨床学研究，**18**，129-138.

本間友巳　2000　中学生の登校をめぐる意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析　教育心理学研究，**48**，32-41.

保坂亨　1996　子どもの仲間関係が育む親密さ――仲間関係における親密さといじめ　平木典子（編）現代のエスプリ353　親密さの心理　至文堂　Pp.43-51.

古市裕一　1991　小・中学生の学校ぎらい感情とその規定要因　カウンセリング研究，**24**，123-127.

古市裕一・玉木弘之　1994　学校生活の楽しさとその規定要因　岡山大学教育学部研究集録，**96**，105-113.

藤岡孝志　1994　学校不適応と教育相談の課題　九州大学教育学部付属障害児臨床センター（編）発達と障害の心理臨床　九州大学出版会　Pp.52-70.

藤竹暁　2000　居場所を考える　藤竹暁（編）現代のエスプリ別冊　現代人の居場所　至文堂　Pp.47-57.

北山修　1993　日本語臨床の深層第３巻　自分と居場所　岩崎学術出版社

久保武・西村秀明　1993　不登校の再検討　教育史料出版会

峰松修・山田裕章・冷川昭子　1984　分裂病圏の学生とPSYCHO-RETREAT　健康科学，**6**，181-186.

文部省中学校課　1992　登校拒否(不登校)問題について――児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して(学校不適応対策調査研究協力者会議報告）　教育委員会月報，**44**，25-29.

中村泰子　1998a　○△□法と居場所イメージ――３事例の検討から――　臨床描画研究，XⅢ，240-260.

中村泰子　1998b　居場所イメージに関する検討――連想語の調査を通して――　日本心理学会第62回大会発表論文集，138.

中村泰子　1999　居場所の尺度作成と因子分析的研究――○△□法の基礎的研究として――　日本心理臨床学会第18回大会発表論文集，374-375.

日本教育心理学会　1996　スクールサイコロジスト（学校心理学に基づくスクールカウンセラー）とは

小畑豊美・伊藤義美　2001　青年期の心の居場所の研究――自由記述に表れた心の居場所の分類――　情報文化研究，**14**，59-73.

大久保智生・青柳肇　2000　心理的居場所に関する研究

(2) ―居場所感尺度作成の試み―日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 161.
奥地圭子 1991 「居場所」について 「東京シューレ」の子どもたち (編) 学校に行かない僕から学校に行かない君へ―登校拒否・私たちの選択― 教育史料出版会 Pp.197-198.
落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的変化 教育心理学研究, **44**, 55-65.
小澤一仁 2000 居場所 久世敏雄・齋藤耕二 (監修) 福富譲・二宮克美・高木秀明・大野久・白井利明 (編) 青年心理学事典 福村出版 Pp.285.
佐治守夫・岡村達也・加藤美智子・八巻甲一 1995 思春期の心理臨床 学校現場に学ぶ居場所づくり 日本評論社
芹沢俊介 2000 居場所について 藤竹暁 (編) 現代のエスプリ別冊 現代人の居場所 至文堂 Pp.35-46.
高柳真人 2000 児童・青年期における発達段階と居場所の関係 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 64.
竹森元彦 1999 心の発達における居場所の役割 鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編), **14**, 127-135.
田島彩子 2000 青年期のこころの居場所―居場所感覚と抑うつ感― 日本心理臨床学会第19回大会発表論文集, 258.
田嶌誠一 1991 青年期境界例との「つきあい方」 心理臨床学研究, **9**, 32-44.
田嶌誠一 1995a 密室カウンセリングよ どこへゆく ―学校心理臨床とカウンセリング― 教育と医学, **43**, 26-33.
田嶌誠一 1995b 強迫的構えとの「つきあい方」の一例 心理臨床学研究, **13**, 26-38.
田嶌誠一 1998 暴力を伴う重篤例との「つきあい方」 心理臨床学研究, **16**, 417-428.
田嶌誠一 2000 学校不適応への心理療法的接近 岡田康伸・鑪幹八郎・鶴光代 (編) 臨床心理学大系18 ―心理療法の展開― 金子書房 Pp.59-77.
田嶌誠一 2001 相談意欲のない不登校・ひきこもりとの「つきあい方」 臨床心理学, **1**, 333-344.
田嶌誠一 2003 臨床心理行為の現状と課題―まとめに代えて 氏原寛・田嶌誠一 (編) 臨床心理行為 創元社 Pp.242-269.
富永幹人・北山修 2001 青年期の居場所―青年期の精神発達の観点から― 子どもたちの居場所と対人的世界の現在 平成10年度～平成12年度科学研究費補助金基盤研究 (A) (1) 研究成果報告書, 179-191.
和田井節子 2002 相談室レイアウトで押さえておきたいポイント 月刊学校教育相談, **16**, 38-41.